

◆仏事の際に配布する『しおり』について

仏事の際に配布する『しおり』は、現在のところ、門徒宅での法要用が6種類(法事用①、お盆用①、七日参り用④、百ヶ日法要用①)、お寺の法要用が4種類(報恩講、盂蘭盆会、春と秋の彼岸会)の合計10種類を作成している。



門徒宅用の『しおり』については、B5版の両面印刷二つ折りで、内容は、「法要次第・法語・法話コラム・仏事の作法やお内仏のお荘厳について」で構成されている。特に法事用とお盆用については、毎回同じ内容とならないようにするため、年に1度、再編集と改訂を繰り返している。

使用方法については、法要にお伺いした際、施主に今日のお参りいただく人数を確認し、施主から法要が始まる前に配布いただく。お勤め終了後に法話コラムと同様のテーマにて、住職より法話をしている。

なお、『しおり』については、「今日の法要の記念品としてお持ち帰りください」と記載してあるため、多くの方が持ち帰っている。

本『しおり』については、本山出版部より同様の趣旨のものが発行されているが、本山のものと大きく異なる点は、①法要次第が入っていること。②法話の際、『しおり』との連動性があること。③適時改訂が加えられること。④住職自身の言葉で書かれおり、寺院としての独自性があること。である。

お参りいただいた方の反応としては、法要前に配布することによって、法要の始まる前や休憩時間に目を通していただける光景をよく目にする。また、『しおり』について、「法要次第が入っているので、今どこまで進んだのか、これからどんなお経が上がるのかがよく分かる」「読んでから法話を聞くとよく理解出来る」「大切な事が書いてあるので、いただいたものは、全部取ってある」などの声が上がっている。



お寺の法要用の『しおり』については、B4版の両面印刷二つ折りで、内容については、法要の種類によって若干の違いはあるが、おおむね「法要次第・法要に込められた願い・お経の現代語訳(抜粋)や報恩講式・嘆徳文の解説」で構成されている。こちらも、門徒宅用の『しおり』と同様、毎年、同じの内容とならないようにするため、年に1度、再編集と改訂を繰り返している。

使用方法については、法要が始まる前、座っていただく前に各自手に取っていただき、見ながら法要にお参りいただいている。

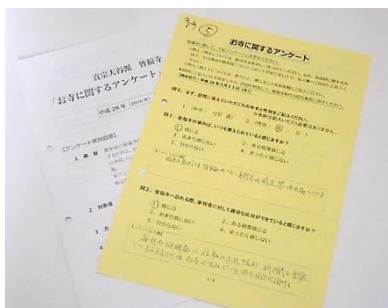
『しおり』作成と配布は、教えを伝えるツールとして大変有効であることはもちろんのこと、ご門徒とのコミュニケーションを深める意味でも大きな役割を果たしている。

実際にご門徒から「お寺さんにいろんなことを聞くには勇気がいる。こんなことも知らないのかと思われたり、叱られたりしやしないかということがどうしても頭をよぎる。また、聞いてお寺さんが答えられなく、恥をかかせてしまっはいけないという思いもある。このような手作りの『しおり』をいただくと、いろいろ聞きやすい」というコメントをいただいた事がある。

法事のお参りの座る場所についてのやりとりが象徴的であるが、僧侶という存在には、一般的に近寄りづらいイメージが付いているように感じる。『しおり』の配布を通して、僧侶と門徒の距離感を縮めることに役だっており、そのことが、お寺を元気にする取り組みに大きな力となっていると感じている。

◆ご門徒とのコミュニケーションの深まりが生みだした取り組み

◎ケース① 「総代主導による「お寺に関するアンケート」の実施。【2016年実施】



『岡崎教区ウェイクアップセミナー「お寺の元気塾」』受講後に、総代へ受講報告をした際に提案され、実施に結びついた取り組み。

ちょうど、1年前に「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」を厳修し、住職も交代したため、絶好のタイミング(大きな節目)ととらえ、未来志向の取り組みとして世話方および御遠忌委員として携わった方(対象者:47名)に対して行ったアンケート。僧侶がなるべく関わらない形態を取り、設問項目の検討から、提出先・集計までを総代主導で実施した。また、アンケート用紙は氏名無記名とし、率直な意見を求めた。

結果、今まで、総代も気がつかなかった改善点や提案など多くの意見をいただくこととなり、今なお、このデータは、今後の取り組みを検討の際に活用されている。

また、この取り組みをとおして、ご門徒の中に、「お寺にいろいろ提案してもいいんだ」という認識が広まったことが最大の成果だと感じている。

◎ケース② 「合葬墓」の建立【2018年建立】

「お寺に関するアンケート」の提案により、実現された取り組み。

ちょうど2017年夏に住職の息子が得度を迎えたこともあり、得度報告法要の記念事業と位置付けて実施した。建立にあたり、総代および門徒の石材店を経営する方に、最近のお墓事情や今後の維持管理について助言をいただき、「本堂にお参りすることが同時にお墓に参ることになる」のコンセプトのもと、本堂裏(御本尊の真裏)に建立された。当寺は過疎化の進む山間部に位置し、跡継ぎのない門徒も多くいるため、その対応策として建立した。



ご門徒からは、「今は利用する予定はないが、合葬墓があることによって、今後、家の存続の危機に直面した時にも、入る場所があるという安心感が得られる」との声もあった。

なお、今後の維持管理については、他の墓地管理規約を参考に、総代とともに協議し、独自の管理規約が整備され、お念仏を大切にされた同朋の入るお墓として、お寺全体で護持していくこととなった。

◎ケース③ 寺院ホームページの開設【2017年開設(継続実施中)】

お参りにお伺いした際、何気ない会話の話題が新たな取り組みへと結びついた事例。

月参りにお伺いした際、お参りの後の会話の中で、たまたまパソコンの話題となり、ご年配のご門徒から、「昨今の若い衆は、みんな調べ事をする時に、スマホやパソコンで調べている。うちの息子も檀那寺の名前は知っているが、あまりお寺に行ったことがないので、自分に万一な事があった時にすぐに連絡を取れるように、お寺のホームページを作ったらどうか」という提案をいただいた。

住職の認識では、ホームページとは、広く一般に情報を公開するためのものであり、更新作業が大変そうなイメージがあったので、開設には消極的であったが、次世代の門徒に向けてという新たな視点をいただき開設に着手した。



開設にあたっては、IT関連の企業にお勤めのご門徒にアドバイスをいただいたり、青壮年のご門徒に閲覧する側の視点をいただきながら、内容を考え作成した。

お寺での法要の際には、ご年配の方へ、息子さんや娘さんにお寺の情報がホームページで見られることを伝

えて欲しいと呼びかけるとともに、門徒宅用の『しおり』にホームページを開設した旨を記載し、周知をはかっている。

閲覧した方からは、「お寺が勤まる日を確認する際に便利」という感想をいただいたり、ご門徒以外の方が、法話を聞きたくて法要にお参りに来てくれたり、様々な反応がある。

ホームページの開設をとおして、青壮年世代の方とコミュニケーションをとる話題ができ、相談に乗ってくれた方から、会うたびにお寺の事を気にかけてくれるようになったことも、ホームページ作成を通じて得た成果の一つである。

◆ご門徒と僧侶で創る「五感で体感できる法座」への取り組み

◎ケース① 報恩講の際に、子ども達による「書き方・書道作品展」の開催【継続実施中】

皆福寺では、毎週金曜日に本堂を開放し、その時間帯に「書き方・書道教室」の会場として利用されている。きっかけは、ご門徒の娘さんが「書き方・書道教室」の会場を探していたところ、そのお宅のお爺さんが、「どうせやるならお寺を貸してもらえ」という一言から始まった。お寺としても、子ども達にお寺を身近に感じていただく良いきっかけと思い、了解して始まって約10年が経つ。「書き方・書道教室」に通う生徒達が、お寺の「子ども会」へ参加する動員力になっていることはもちろんのこと、体感する法座の創造にも一役買っている。

お寺と「書き方・書道教室」とのコラボレーション企画として、毎年、皆福寺の報恩講から年明けまでの期間(11月中旬～1月3日)、生徒の作品を本堂大間に貼り出し、「書き方・書道作品展」を開催している。展示される作品は、「みほとけ」や「恩徳」、「念仏」といった、仏教にちなんだ言葉ばかり。これは、発表作品を考える際、住職が候補の文字を考え、「書き方・書道教室」の先生が、各学年に合わせて、その中から選定し、10月の課題として生徒へ与えて、約1ヶ月間練習を重ねてきたもの。



この取り組みは、ご門徒の方々を報恩講へ足を向けていただく一助になっている。また、年配の参拝が多い当寺の報恩講において、若いエネルギーに包まれながら、皆と一緒に『正信偈』をお勤めする雰囲気は、老若男女の一体感を生み出し、報恩講を荘厳する大きな要素となっている。

また、作品を提供してくれた生徒へは、毎年、本山から発行されている『ほとけの子』のしおりと『青少幼年教材』(今年度は「赤ほんくん消しゴム」)をセットにして、記念品としてお渡ししている。

過疎化が進む中、生徒の数も減少傾向であるが、教室が続く限り、継続していきたい取り組みである。

◎ケース② 歳末勤行の際、残蠟を使用した竹灯籠でのお出迎え企画の実施【継続実施中】

「本堂で使用した残蠟がもったいないので、何か再利用できなか」との声から実現した取り組み。

皆福寺では、大晦日の日、午後11時30分から、歳末勤行をお勤めし、その後、集まった方で、除夜の鐘を突いている。その際に、足もと照らす明かりとして、残蠟を使用している。

毎年、報恩講(11月中旬厳修)の準備のための境内清掃の際に、ご門徒にお寺の竹藪から孟宗竹を切り出していただき、コップ状に刻んで、竹のカップを作成していただく。年末に、今年一年間に本堂で使用した蠟燭の残蠟を竹のカップに差込み、当日、境内に並べて、参拝者の足下を照らす明かりにしている。



当寺は、山間部に位置することもあり、看板やネオンの光もなく、境内が幻想的な雰囲気に包まれ、好評を得ている。

ただ、歳末勤行の開始時間が、午後11時30分からということもあって、大晦日の晩に、各家庭でお酒をたしなまれる方もあり、「行ってみたいけれども、その時間だと起きとれん」という声も聞かれる。近くに公共交通機関も一切無く、自動車でないといと来寺することが困難なため、今年度は、時間を早め、午後5時から歳末勤行をお勤めする予定。

また、今年度、竹灯籠とともに、ご門徒から、自宅にて切り出した支障木よって作成したスエーデントーチ(きこりのろうそく)を寄付いただいたため、竹燈籠に合わせて実施する予定。

◎ケース③ お参りにちょっとした“張り合い”プラス

『皆福寺もんぼうカード』の取り組みを開始【2019年7月より実施】



1	報知 徳用	2	自家 身信	3		4	
5		6		7		☆	
8		9		10		11	
12		13		14		☆	

『皆福寺もんぼうカード』とは、皆福寺で厳修される法座を対象とした、参拝スタンプカード。皆福寺の法座(同朋会・報恩講など)にお参りすると、法語印と呼ばれるスタンプを受付係の総代に押印していただける。法語印が7個貯まると、ささやかな記念品が贈呈される。

この寺業は総代会において協議が重ねられ、2019年6月に世話方装会において承認され、取り組みを始めたばかりの寺業。

参拝者の高齢化が進み減少していくなか、少しでも多くの方に法座(同朋会・報恩講等)へお参りしていただき、仏教の教えに触れていただくことを願いとして、僧侶(スタンプ作成担当)と門徒(受付担当)が連携して取り組む寺業である。

昨今、たびたびメディアでも取り上げられる御朱印ブームと、店舗で活用されているスタンプカードをアレンジし、仏法を伝える手段として総代会においてアイデアを出し合って内容を決定した。ただ単にスタンプを押印するだけでなく、スタンプ(法語印)を通して、法語(仏教のことば)に触れていただき、仏教の教えを知っていただくために、毎回、異なる法語のスタンプ(現在7種類作成、今後14種類まで作成予定)を押印することとした。

また、記念品贈呈までに7個としたのも、皆福寺は、年間14日の法座(月1回および、報恩講は3日間)があるため、その半分という意味と、六道(迷いの世界)を超えるという意味から7個とし、仏法の要素を多く含んだ取り組みとなっている。

また、記念品についても、皆福寺の『寺業計画書』の「お寺の使命」に記載した「月に一度は、お寺で心の洗濯を！」をもとに、洗濯にちなんだ洗剤などの日用品で使用できるものとし、記念品に法語を記載したのし紙を巻き、お渡ししている。今後は、何種類か記念品用意し、自分の好きなものを一つ選んでいただくような方法も検討されている。

また、始まったばかりの寺業のため、カードを忘れた方や紛失した方の対応をどうするか?や、法語印に込められたことば意味をもっとアピールする方法をどうするか?など種々課題は出てきているが、参拝者からも「お寺参りにちょっとした楽しみがあってもいいよね」など好意的な感想が寄せられており、課題を克服しながら、継続して続けていきたいと考えている。

(別紙添付「皆福寺もんぼうカード」チラシ参照)

以上